

各関係機関団体の長 } 殿  
各病虫害防除員 }

福岡県病虫害防除所長  
(福岡県農林業総合試験場病虫害部予察課)

平成26年度病虫害発生予報第4号(7月)について

このことについて、病虫害発生予報第4号を発表したので送付します。

予報第4号

**チャトゲコナジラミの適期防除に努めましょう**

チャトゲコナジラミは、平成21年7月に県内で初めて確認されて以降、徐々に発生地域が拡大し、現在は県内の茶産地のほとんどで発生が確認されています。

チャトゲコナジラミは、年3～4回発生します。成虫が発生ピークを過ぎ、茶園で飛び回るのを見かけなくなった頃が、次世代若齢幼虫の多発期で、防除適期でもあります。

第1世代成虫の発生ピークは、標高によって差がありますが、例年7月中旬～8月上旬頃になります。茶園での成虫の発生状況に留意し、適期防除に努めて下さい。

なお、チャトゲコナジラミは、ごく少数から急激に増殖しますので、昨年度、発生が少なかった茶園でも防除を徹底して下さい。



成虫



葉裏にとまっている成虫群



2～4齢幼虫

<予想される向こう1か月の天候(平成26年6月28日～7月27日)>

期間の前半は、平年に比べ曇りや雨の日が多く、後半は平年と同様に晴れの日が多いでしょう。向こう1か月の平均気温は平年並で、降水量は平年並か多く、日照時間は平年並か少ないでしょう。週別の気温は、1週目は平年並か低く、2週目は平年並で、3～4週目は平年より高いでしょう。

向こう1か月の気温、降水量、日照時間の各階級の確率(%)

要素	低い(少ない)	平年並	高い(多い)
気温	30	40	30
降水量	20	40	40
日照時間	40	40	20

(福岡管区气象台 平成26年6月26日発表抜粋)

7月における主な病害虫の発生動向は、次のように予想されます。

主な病害虫の発生予報概要

作物名	病害虫名	発生量 (現況)	発生量 (7月の発生予報)	
		平年比	平年比	前年比
水稲	セジロウンカ トビイロウンカ	少 並	少 並	並 少
かんきつ	黒点病 ミカンハダニ	並 並	並 やや少	やや多 やや少
なし	黒星病 ナシヒメシンクイ	多 少	多 少	多 並
かき	炭疽病 フジコナカイガラムシ	やや少 多	やや少 多	並 やや多
果樹共通	チャバネアオカメムシ	多	—	多
茶	炭疽病 カンザワハダニ チャノキイロアザミウマ チャトゲコナジラミ	並 少 少 少	並 少 少 —	並 並 並 少
冬春イチゴ (育苗期)	うどんこ病 炭疽病 ハダニ	少 並 やや多	並 やや多 並	やや多 やや多 並

注：果樹共通・チャバネアオカメムシの平年比について、現況は年次変動が大きいため、前年比としている。

作物別発生予報

予報の根拠の末尾の( )書きは、(+)は発生を助長する要因、(-)は発生を抑制する要因であることを示します。

【普通作物：水稲】

1 セジロウンカ

(1) 予報の内容

発生量：平年より少、前年並

(2) 予報の根拠

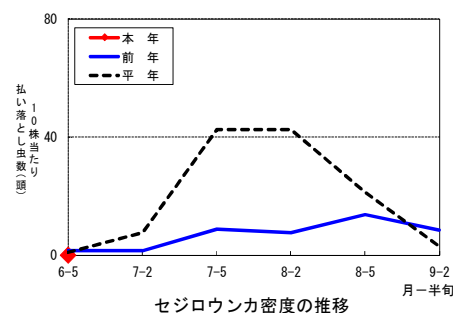
ア 6月21日に予察灯(糸島市)で、初飛来を確認した。

イ 6月5半旬調査の結果、発生量は平年より少なかった(-)。

10株当たり成幼虫数0頭(平年0.81頭、前年1.49頭)

ウ 向こう1か月の気象予報では、気温は平年並で、降水量は平年並か多いとされている。

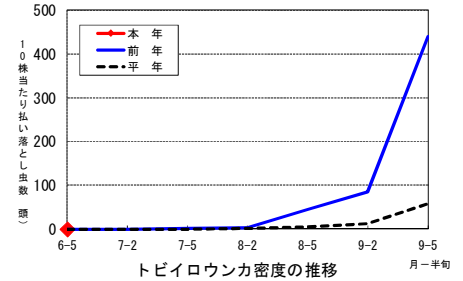
(3) 防除上の注意



- ア 今後の飛来状況に十分注意する。
- イ 箱施薬剤が施用されていないほ場では、発生状況に注意する。  
また、移植時期が早いほ場では、箱施薬剤の残効がなくなっている恐れがあるので注意する。
- ウ 農薬の使用及び散布等にあたっては、p 9の内容を確認の上、適切に実施する（以下の病害虫についても同様）。

## 2 トビイロウンカ

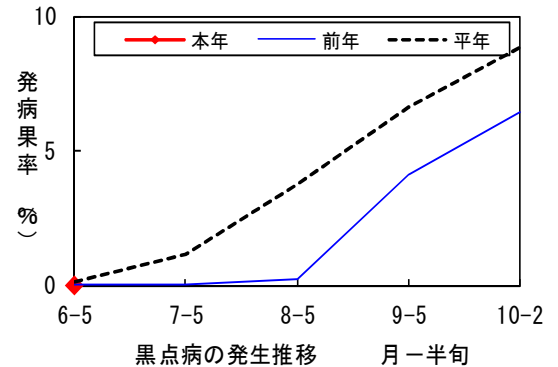
- (1) 予報の内容  
発生量：平年並、前年より少
- (2) 予報の根拠  
ア 6月5半旬調査の結果、発生量は平年並であった。  
10株当たり成幼虫数0頭（平年0.01頭、前年0.05頭）
- イ 向こう1か月の気象予報では、気温は平年並で、降水量は平年並か多いとされている。
- (3) 防除上の注意  
ア 今後の飛来状況に十分注意する。  
イ 箱施薬剤が施用されていないほ場では、発生状況に注意する。  
また、移植時期が早いほ場では、箱施薬剤の残効がなくなっている恐れがあるので注意する。  
ウ ほ場内では集中分布するので、ほ場全体の発生状況を把握する。



## 【果樹：かんきつ】

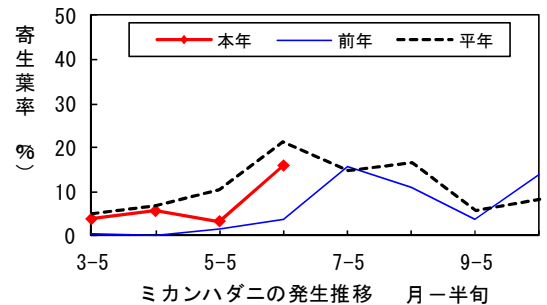
### 1 黒点病

- (1) 予報の内容  
発生量：平年並、前年よりやや多
- (2) 予報の根拠  
ア 6月5半旬調査の結果、発生量は平年並であった。  
発病果率 0.2%（平年0.1%、前年0.0%）  
発生ほ場率 9.1%（平年8.3%、前年8.3%）
- イ 向こう1か月の気象予報では、気温は平年並で、降水量は平年並か多いとされている（+）。
- (3) 防除上の注意  
ア 伝染源である枯れ枝は極力除去し、園外に持ち出して処分する。  
イ 前回の散布から1か月後、又は積算降水量250mmを目安に防除を実施する。
- ウ 農薬の使用及び散布等にあたっては、p 9の内容を確認の上、適切に実施する（以下の病害虫についても同様）。



### 2 ミカンハダニ

- (1) 予報の内容  
発生量：平年・前年よりやや少
- (2) 予報の根拠  
ア 6月5半旬調査の結果、発生量は平年並であった。  
寄生葉率 16.0%（平年21.5%、前年3.9%）  
発生ほ場率 72.7%（平年61.1%、前年33.3%）
- イ 向こう1か月の気象予報では、気温は平年並で、降水量は平年並か多いとされている（-）。
- (3) 防除上の注意  
ア 薬剤防除に当たっては、薬液が葉裏に十分かかるよう丁寧に散布する。



【果樹：なし】

1 黒星病

(1) 予報の内容

発生量：平年・前年より多

(2) 予報の根拠

ア 6月5半旬調査の結果、発生量は平年より多かった(+)。

発病葉率 3.0% (平年 1.1%、前年 1.8%)

発生ほ場率 63.6% (平年 52.1%、前年 66.7%)

発病果率 1.6% (平年 0.8%、前年 1.3%)

発生ほ場率 54.5% (平年 29.9%、前年 50.0%)

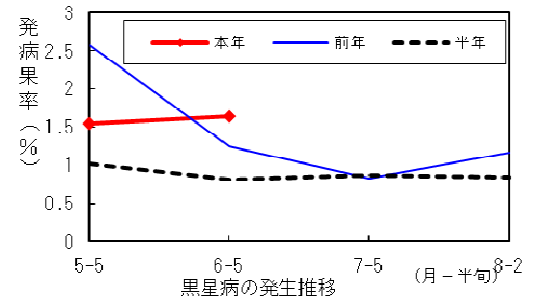
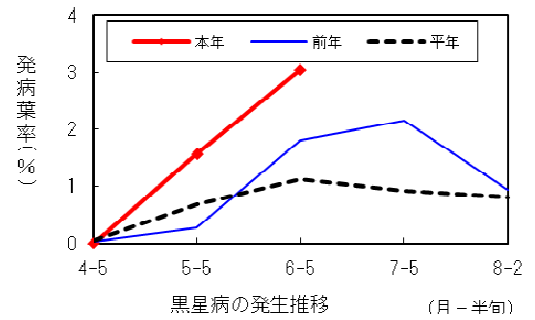
イ 向こう1か月の気象予報では、気温は平年並で、降水量は平年並か多いとされている(+)

(3) 防除上の注意

ア 罹病葉や罹病果実は、伝染源となるので除去し、園外に持ち出し処分する。

イ 薬剤感受性の低下を避けるため、同一系統薬剤の連用は避け、異なる系統の薬剤をローテーション散布する。

ウ 薬剤防除にDMI剤を用いる場合は、保護殺菌剤を混合する。ただし、有機銅剤は効果が低下するため混用しない。



2 ナシヒメシクイ

(1) 予報の内容

発生量：平年より少、前年並

(2) 予報の根拠

ア 第1世代成虫発生時期である5月4半旬～6月4半旬のフェロモントラップの誘殺虫数は、平年より少なかった(-)。

11頭 (平年 175頭、前年 39頭)

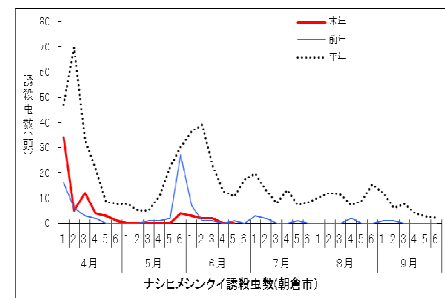
イ 向こう1か月の気象予報では、気温は平年並で、降水量は平年並か多いとされている。

(3) 防除上の注意

ア 発蛾最盛期直後を目安に防除を行なうが、発蛾最盛期を過ぎても成虫が多く見られる場合は、1回目の防除の7～10日後に追加防除を行う。

イ 幼虫は主に果頂部から果実に食入加害するので、防除に当たっては果実に薬液が十分かかるように散布する。

ウ 被害果は埋没処分し、発生源を除去する。



【果樹：かき】

1 炭疽病

(1) 予報の内容

発生量：平年よりやや少、前年並

(2) 予報の根拠

ア 6月5半旬調査の結果、発生量は平年よりやや少なかった(-)。

発病枝率 0% (平年 0.4%、前年 0%)

発生ほ場率 0% (平年 17.7%、前年 0%)

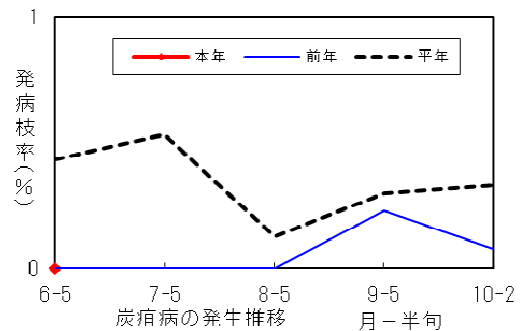
発病果率 0% (平年 0.0%、前年 0.2%)

発生ほ場率 0% (平年 1.5%、前年 7.7%)

イ 向こう1か月の気象予報では、気温は平年並で、降水量は平年並か多いとされている(+)

(3) 防除上の注意

ア 伝染源となる罹病枝や罹病果実は、見つけ次第取り除き、園外に持ち出し処分する。



## 2 フジコナカイガラムシ

### (1) 予報の内容

発生量：平年より多、前年よりやや多

### (2) 予報の根拠

ア 6月5半旬調査の結果、発生量は平年より多かった(+)。

寄生果率 9.2% (平年 5.4%、前年 7.1%)

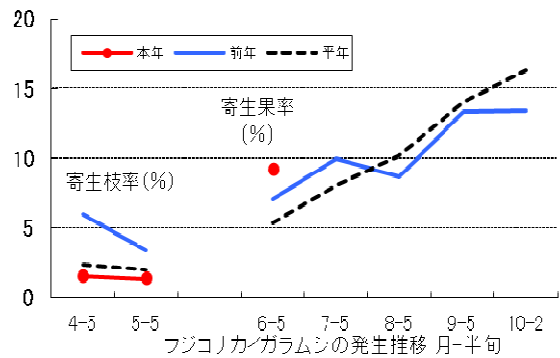
発生ほ場率 66.7% (平年 66.9%、前年 84.6%)

イ 向こう1か月の気象予報では、気温は平年並で、降水量は平年並か多いとされている。

### (3) 防除上の注意

ア 薬剤がかかりにくい部位に寄生しているので、散布ムラがないように丁寧に薬剤散布を行う。

イ 薬剤散布にあたっては、できるだけ天敵類に影響の少ない薬剤を選択する。



## 【果樹：共通】

### 1 チャバネアオカメムシ

#### (1) 予報の内容

発生量：前年より多

#### (2) 予報の根拠

ア チャバネアオカメムシ越冬量は、前年より多かった(前年比:+)。

チャバネアオカメムシの越冬量およびヒノキ球果着生量の年次推移

	平成 26 年 (本年)	平成 25 年 (前年)	平成 24 年 (前々年)	平成 14 年 (多発年)
越冬量 (頭/m <sup>2</sup> )	4.8	0.7	3.2	4.6
ヒノキ球果着生量	中	中	少	中

イ 6月1半旬～4半旬までの予察灯でのチャバネアオカメムシ誘殺虫数は、前年より多かった(前年比:+)。

<調査地点：うきは市浮羽町>

本年 59頭 (前年 15頭、前々年 24頭)

<調査地点：朝倉市杷木町>

本年 25頭 (前年 7頭、前々年 146頭)

イ 6月1半旬～5半旬までのフェロモントラップでのチャバネアオカメムシ誘殺虫数は、前年より多かった(前年比:+)。

<調査地点：筑紫野市吉木>

本年 7,053頭 (前年 487頭、前々年 5,099頭)

ウ 向こう1か月の気象予報では、気温は平年並で、降水量は平年並か多いとされている。

#### (3) 防除上の注意

ア 園内における発生状況の把握に努め、適期防除を行う。

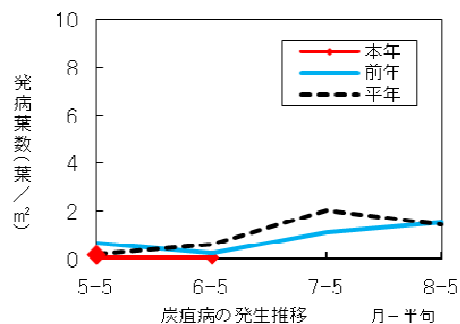
## 【果樹：その他の病害虫】

作物名 病害虫名	発生量 (現況)	発生量 (7月の発生予報)		防除上注意すべき事項等
	平年比	平年比	前年比	
ナシ ハダニ類	並	やや少	少	・多発生すると防除が困難になるので、発生の少ない時期の防除を徹底する。
カキ うどんこ病 ハマキムシ類	多 並	多 並	多 並	・葉裏にかかるよう丁寧に散布する。 ・発生が多い園では、8月上～中旬の防除を徹底する。

## 【茶】

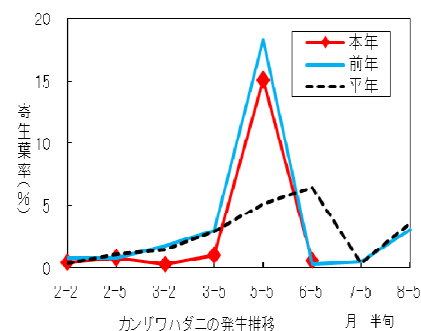
### 1 炭疽病

- (1) 予報の内容  
発生量：平年・前年並
- (2) 予報の根拠  
ア 6月5半旬調査の結果、発生量は平年並であった。  
発病葉数 0.1葉（平年 0.6葉、前年 0.3葉）  
発生ほ場率 16.7%（平年 15.3%、前年 35.7%）  
イ 向こう1か月の気象予報では、気温は平年並で、降水量は平年並か多いとされている（+）。
- (3) 防除上の注意  
ア 二番茶摘採後、刈り落とし後の発生に注意し、萌芽から1葉期までに防除を行う。  
イ 雨滴により胞子が飛散伝搬するので、降雨前の防除効果が高い。  
ウ 薬剤感受性低下を避けるため、同一系統薬剤の連続散布を避け、異なる系統の薬剤をローテーション散布する。  
エ 農薬の使用及び散布等にあたっては、p9の内容を確認の上、適切に実施する（以下の病害虫についても同様）。



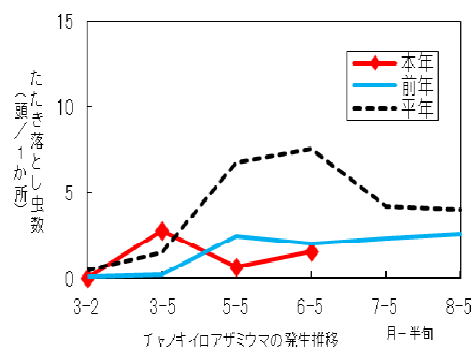
### 2 カンザワハダニ

- (1) 予報の内容  
発生量：平年より少、前年並
- (2) 予報の根拠  
ア 6月5半旬調査の結果、発生量は平年より少なかった（-）。  
寄生葉率 0.6%（平年 6.5%、前年 0.3%）  
50葉当たり虫数 0.14頭（平年 20.3頭、前年 0.23頭）  
発生ほ場率 14.3%（平年 31.5%、前年 15.4%）  
イ 向こう1か月の気象予報では、気温は平年並で、降水量は平年並か多いとされている（-）。
- (3) 防除上の注意  
ア 発生状況をよく観察し、寄生葉率が2%以上の茶園では、摘採後、多発する前に速やかに防除を行う。  
イ 薬剤感受性低下を避けるため、同一系統薬剤の連続散布を避け、異なる系統の薬剤をローテーション散布する。



### 3 チャノキイロアザミウマ

- (1) 予報の内容  
発生量：平年より少、前年並
- (2) 予報の根拠  
ア 6月5半旬調査の結果、発生量は平年より少なかった（-）。  
たたき落とし虫数 1.5頭（平年 7.5頭、前年 2.0頭）  
発生ほ場率 66.7%（平年 90.2%、前年 69.2%）  
イ 向こう1か月の気象予報では、気温は平年並で、降水量は平年並か多いとされている（-）。
- (3) 防除上の注意  
ア 発生状況に留意し、たたき落とし（B5版上）で10頭以上発生している場合は防除を行う。  
イ 新芽の萌芽から開葉期を重点に防除する。





#### 4 チャトゲコナジラミ

(1) 予報の内容

発生量：前年より少

(2) 予報の根拠

ア 6月5半旬調査の結果、発生量は前年より少なかった(一)。

寄生葉率 4.3% (前年 36.8%)

1葉当たり虫数 4.9頭 (前年 92.1頭)

発生ほ場率 42.9% (前年 69.2%)

イ 向こう1か月の気象予報では、気温は平年並で、降水量は平年並か多いとされている。

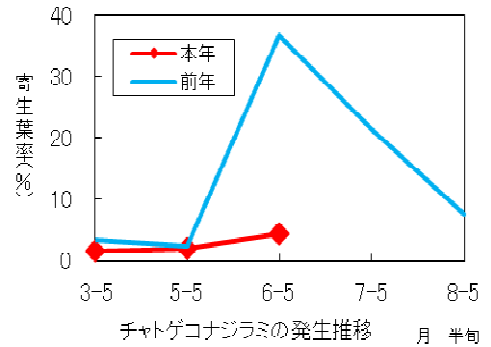
(3) 防除上の注意

ア チャトゲコナジラミは年3～4回発生する。防除適期は若齢幼虫発生期であり、成虫の発生ピークが収まった頃に相当するが、標高によって発生ピークに差があり、標高が高い程その時期は遅くなる。

なお、直近の成虫(第1世代)発生ピークは、平坦地で7月上～中旬頃、山間地で8月上旬頃と予想される。

イ 第1世代成虫は越冬世代成虫に比べて数が少なく、特に発生初期の茶園では、園を飛翔する成虫の多寡を判断するのが困難である。成虫のトラップ誘殺データを基に指導機関が出す技術情報を活用し、防除適期を判断する。

ウ 幼虫は葉裏に寄生しているので、農薬の散布にあたっては、葉裏に十分にかかるように丁寧に散布する。



#### 【茶：その他の病害虫】

作物名 病害虫名	発生量 (現況)	発生量 (7月の発生予測)		防除上注意すべき事項等
	平年比	平年比	前年比	
チャノココクモンハマキ	並	並	並	第2世代成虫の発蛾最盛期は、7月下旬頃と予想されるので、ほ場での成虫の発生に注意し、成虫が最も多いときから7日後を目安に防除を行う。巻葉後は防除効果が劣るため、巻葉が見られたら直ちに防除を行う。
チャノホソガ	少	少	並	第2世代成虫の発蛾最盛期は、7月初め頃と予想されるので、ほ場での成虫の発生に注意し、成虫が最も多いときから7日後を目安に防除を行う。巻葉後は防除効果が劣るため、葉巻が見られたら直ちに防除を行う。
チャノミドリヒメヨコバイ	並	並	やや多	発生状況に注意し、たたき落とし(B5判上)で4頭以上発生している場合は防除を行う。効果の高い薬剤が少ないので多発する前に防除する。

#### 【野菜：イチゴ】

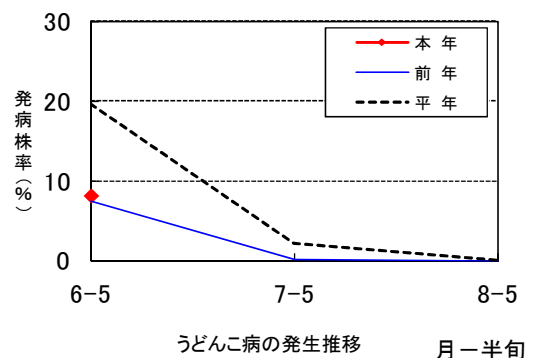
##### 1 うどんこ病(育苗期)

(1) 予報の内容

発生量：平年並、前年よりやや多

(2) 予報の根拠

ア 6月5半旬調査の結果、発生量は平年より少なかった(一)。



発病株率 8.2% (平年 19.6%、前年 7.4%)

イ 向こう1か月の気象予報では、気温は平年並で、降水量は平年並か多いとされている(+)

(3) 防除上注意すべき事項

ア 苗の間隔を空けて通風を図る。

イ 伝染源である罹病葉は摘葉し、薬剤防除を徹底する。

ウ 農薬の使用及び散布等にあたっては、p 9の内容を確認の上、適切に実施する(以下の病害虫についても同様)。

## 2 炭疽病(育苗期)

(1) 予報の内容

発生量: 平年・前年よりやや多

(2) 予報の根拠

ア 6月5日半旬調査の結果、発生量は平年並であった。

発病株率 0% (平年 0.1%、前年 0%)

イ 向こう1か月の気象予報では、気温は平年並で、降水量は平年並か多いとされている(+)

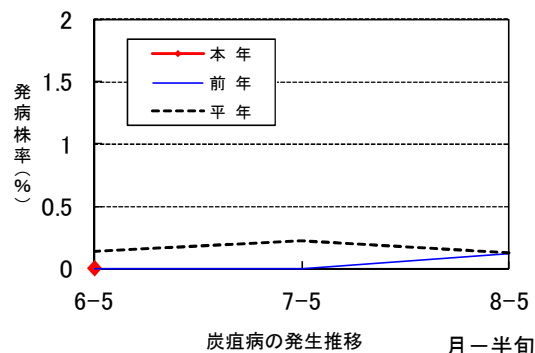
(3) 防除上注意すべき事項

ア 高温期の激しい降雨や過剰なかん水により、急速に蔓延することがあるので、ほ場内での発生状況に注意し、罹病苗及び周辺の苗は速やかに持ち出し処分する。

イ 雨よけ育苗等で風通しが悪いと発生しやすいため、苗の間隔を空けて通風を図るとともに、鉢の土壌水分を適切に保つようなかん水を行う。

ウ 窒素肥料を多用すると発生しやすいので、適正な肥培管理に努める。

エ 発病後の薬剤散布は効果が低いので、葉かき作業直後や降雨前後を含めて定期的に予防散布を徹底する。



## 3 ハダニ類(育苗期)

(1) 予報の内容

発生量: 平年・前年並

(2) 予報の根拠

ア 6月5日半旬調査の結果、発生量は平年よりやや多かった(+)

寄生株率 11.7% (平年 8.8%、前年 7.7%)

イ 向こう1か月の気象予報では、気温は平年並で、降水量は平年並か多いとされている(-)

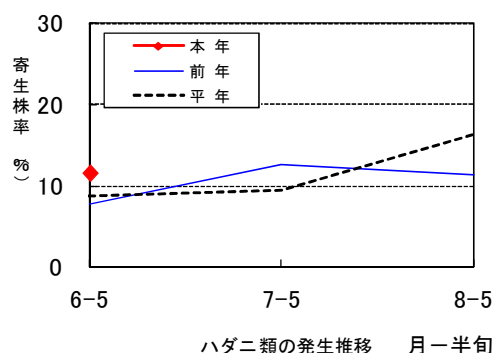
(3) 防除上注意すべき事項

ア 多発後は防除が困難になるので、発生状況に注意し、発生初期の防除を徹底する。

イ ほ場内や周辺の草は増殖の場となるので、除草を徹底する。

ウ 摘葉した葉はほ場内に放置せず、ビニール袋等に入れて密封し、処分する。

エ 抵抗性がつきやすいので、同一系統薬剤の連用は避ける。





# 農薬の安全・適正使用、飛散防止対策の徹底を！

福岡県では、農薬の安全かつ適正な使用及び保管管理、使用現場における周辺への配慮を周知徹底するとともに、農薬による事故防止を目的として、安全使用講習会の開催や啓発チラシの配布等を関係機関、団体と一体となって取り組んでいます。

使用者の安全はもちろん、人畜・隣接作物・河川等への配慮について、ご指導をお願いします。

## 1 農薬適正使用の徹底

○適用作物、使用量や濃度、使用時期、総使用回数などが記載されたラベルをよく確認し、使用基準を遵守する。

※農薬の種類によっては、登録の内容がメーカーによって異なるので、ラベルをよく確認する。

(例：スミチオン水和剤40は、メーカーによって適用作物名や適用病害虫名が異なる)

## 2 飛散防止対策の徹底

○風の弱い時に散布する。

○風向、散布方向、散布時間、散布圧などに留意する。

○飛散しにくい農薬（剤型）や飛散が少ないドリフトレスノズルを使用する。

○散布ほ場周辺の収穫前の作物には十分注意する。

## 3 保護具の着用

○農薬の散布時には、ラベルの注意・警告マークをよく確認し、マスク、保護メガネ、ゴム手袋等を着用する。

## 4 農薬の散布後は、必ず散布器具を洗浄

○噴霧器、薬液タンク、ホースなどの散布器具を十分に洗浄する。

## 5 防除履歴の記帳

○農薬の散布が終わったら、作物名、ほ場の場所、使用年月日、薬剤名、使用濃度、使用量等を正確に記帳する。

## 6 空容器の処分

○空容器は、産業廃棄物処理業者に委託するなど、適切な処分を行う。

また、野焼きは法令で禁止されているので行わない。